第二回リレー小説「梅雨」赤組五番手

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　不明

　信州の山の中で、僕らは最期の時が来るのを待っていた。生い茂る木々の合間を縫うように雨が降り続ける。そんなに強い雨ではない。雫の身体は少しずつ少しずつ泡となり、雨と混ざって消えていく。僕の太ももに頭をのせて仰向けに寝そべった雫は、安らかな気持ちで最期を迎えられそうな様子に見えた。先輩が描いてくれた僕の絵を抱きかかえ、目を閉じ、ゆっくりと呼吸を繰り返している。僕の手にも雫の描かれた絵がある。雫はきっと安心できたんだろう。この世から雫が消えても雫の絵は僕のもとに残る。雫はあの世に僕の絵を持っていく。だからいつまでも一緒にいられる。雫はそう思って安心しているんだ。だから言わないでおこう、絵の方の雫も現実の雫と同じように消えていっていることを。

「うにゅー」

　雫が小さく声を上げた。

「どうした」

　僕も、雨の音にとけるくらいの声で返事をする。

「最近、朝焼け、見てない」

　雫は消え入りそうな声で言った。

「夕焼けも見てないな」

　陽の光をまともに見たのは何日前だっただろうと、少し頭を巡らせた。思い出せなかった。ずっと雨が降っているから、太陽は雲の向こうに隠れている。

「ふぉー」

　雫が叫んだ。その叫びは、力なく土の下へと沈みこんでいった。

「あまり無理して声を出すと体に負担がかかるよ」

　僕がそう言うと、雫は少し寂しそうな、でもちょっと満足したような顔をして僕を見た。そして再び目を閉じた。目を閉じたまま、もう一度口を開いた。

「傘、ないんだっけ」

　傘はなかった。

「ないよ」

「ふにゅー」

　雫がまたよく分からない声を上げた。どんな気持ちで雫はそんな声を上げるんだろう。そういえばあまり考えたことがなかった。考えても分からないだろうな、と思った。雫自身も、自分の叫びが何を意味しているのかを分かっていないような気がした。

　その時、突然木々の間から誰かが現れた。ぼろぼろになった服。土で汚れた体。秩序なく振り乱された長い髪。悪戯っぽく光る二つの目。先輩だった。

「やっと見つけた」

　先輩は息を切らしながら、心底ほっとしたような声で言った。

「先輩、なんでここにいるんですか」

　僕は驚いて尋ねた。先輩はその問いに答えず、「はっはっ」と乾いた笑い声を上げた。そしてすぐに笑いをやめ、僕と雫を見つめた。いつもは見せない真剣そうな表情だった。ずっと遠くの方を見てから徐々に焦点を合わせていくような見つめ方だった。

　見つめながら、先輩は歩いてこちらへ近づいてきた。先輩の体はこれ以上濡れることのできないほど濡れている。だらっと垂れた服や、手や、足や、頭が、雨の中を引きずられて迫ってくる。その様子は、まるで生まれたばかりの赤ちゃんが意志をもって歩いてくるかのようで、少し怖かった。

　先輩は僕と雫の目の前に立った。雫は相変わらず目を閉じて、起きているのか寝ているのか分からないような様子で呼吸を繰り返していた。身体は、かなりの割合が消えてしまっていた。

　そこで先輩が選んだのは、僕と雫の持っていた絵を破り捨てるという行為だった。僕と雫から絵を取り上げ、絵だったということが分からなくなるくらいまで何度も何度も破り続けた。遠くを見ているような目をしながらひたすら破り続けた。僕はもちろんそれをやめさせようとした。先輩につかみかかり、やめてくれと叫んだ。でも、先輩はやめなかった。

　その行為が終わったあと、先輩は言った。

「俺は迷惑をかけられるのも好きだが、迷惑をかけるのも好きなんだ」

　僕は何も言えずに先輩を見ていた。

「じゃあな」

　先輩は走って帰ってしまった。雨足が少し弱まってきていた。この雨がやんだ時、雫は完全に消えてしまう。

　僕は雫の方を見た。雫は、もうほとんど消えてしまっている体を起こしてこちらを見ていた。目が見開かれ、口元は震えていた。目の当たりにした現実は、雫にとってどんなものとして表れているんだろう。雫の表情からそれを読み取るのは少し難しい気がした。

　僕は雫に寄り添って空を見上げた。雨粒が顔に当たる。

「絵、なくなっちゃったね」

　僕の横で雫が言った。僕は、どう返していいか分からず、「うん」とだけ答えた。

「ううー」

　雫が唸る。少し力がこもっていた。

「傘も、ないんだよね」

「あぁ、傘もないんだよ」

　実際のところ、何も分からなかった。先輩はなぜあんなことをしたのか。雫が何を考えているのか。僕はなぜ雫に何も言えないのか。全く分からなかった。これらのことが先輩にとってどんな意味を持つのか。これらのことが雫にとってどんな意味を持つのか。これらのことが僕にとってどんな意味を持つのか。分からない。分からなくて、呆然とする。

「眠いぴょん」

　雨がやみ、かすかな晴れ間がのぞくと同時に、雫は言った。僕は小さく頷いて雫を見つめる。雫は最後に少しだけ笑顔を見せて、泡になった。最後の泡が目の前で弾けた。久しぶりに射した淡い陽の光の中で、僕は泣いた。